



令和元年度

文化庁「日本遺産」認定！



館林市の「里沼」

SATO-NUMA

里沼(SATO-NUMA) — 「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 —

館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。

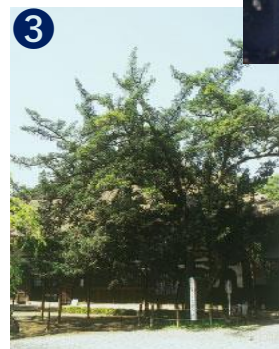
①

いのぬま もりんじぬま “祈りの沼” 茂林寺沼

「祈りの沼」～里沼の原風景を残す茂林寺沼～

- ❖かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。沼や湿原には、鯉や鮒、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水を取りまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。
- ❖茂林寺沼には、なぜ今も原風景が残っているのか？そこには、600年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり、「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。そして、寺に伝わる貉(狸)の古譚「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。
- ❖茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅(葦)を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な動植物の棲みかの沼との共存が図られている。

茂林寺沼周辺の「日本遺産」構成文化財



④堀工町のどんと焼きは熊野神社の神事として毎年1月に行われています。

① もりんじぬま ていちしつげん 茂林寺沼及び低地湿原 群馬県天然記念物	館林市の南部にある周囲約 1 kmの沼とその周囲に広がる低地湿原。なかでも低地湿原は関東平野に残る数少ないもので、今も自然環境を良好に残す。希少種のコウホネやカキツバタなどの水生・湿原植物、トンボなど湿原の貴重な動物が生息し、古刹・茂林寺とともに「祈りの沼」の景観を醸し出している。
② もりんじ ぶんふくちやがま 茂林寺 (分福茶釜) 未指定(遺跡)	応永33年(1426)、茂林寺沼の畔に「祈りの場」として開山した寺院。江戸時代の茅葺屋根の本堂と山門があり、茅は茂林寺沼の葦が使用されてきた。貉(狸)の化身である守鶴がもたらしたという茶釜「分福茶釜」が伝わり、明治時代の巖谷小波の童話で全国に知られるようになった。山門前には狸像が並び、境内には童話を伝える巖谷小波の詩碑がある。
③ もりんじ 茂林寺のラカンマキ 群馬県天然記念物(植物)	茂林寺の本堂前にある樹齢約 600 年、樹高 14m の巨木。茂林寺の開山とともに、刃先が尖っているため魔除けとして植えられ、「祈りの場」となった歴史を伝える。
④ ほりくちょう 堀工町のどんと焼き 未指定(年中行事)	江戸時代から続く行事で、茂林寺沼近くにある熊野神社の神事として行われていた。現在は地区の行事として、毎年1月15日に近い日曜日に、古いお札やだるまなどを焚いて、1年間の無病息災を祈る。お焚き上げのヤグラは、茂林寺沼で刈った葦やナスガラなどを積み上げて作られる。